

ペン俳句会 句会報(第三七一号)

令和七年七月三日(木)

兼題『蟬』、席題『曲』

句会を、先月六月と同じ場所で開催。投句八名。  
出席七名。(欠席は良知さん、ゆふきさん、金魚  
姫さん)

宮原 凧

記憶より小さき街並み夏落暉

猫が行く楠の木の下蟬の穴

群れてゐて青の淋しき矢車草

夜べの雨トルコ桔梗の藍深し

黒南風やピアノ曲聴き齒の治療

「いい風」と一会の人と片陰り

大津 そうかい

幣揺らし神殿抜くる夏の風

口中の飴噛み潰す炎暑かな

風鈴や知らぬ間に妻家になく

茹でたての艶めくうどん藍浴衣

夕焼やジンタの響き曲馬団

初蟬の濁声めきてすぐ止めり

松田 一文字

全山を覆ひ尽くせる蟬時雨

十葉の空き家の庭を埋めをり

米めぐる狂奏曲や梅雨初め

庭石に噛みつく昼の蜻蛉かな

闇を喰ひ殻割り出でて蟬真白

片陰を伝ひ行きけり人と猫

中村 晃也

空蟬の溺れてゐたる潦

噴煙は雲に届かず蟬の殻

貝殻の道浜茄子とゴム草履

人生は紆余曲折よ心太

郭公の一日(ひとひ)木霊を連れ歩く

梅雨入りや手すさびで弾くピアノ曲

安藤 晃二

夏宵の沁み入る調べノクターン

文月の三曲合奏朗々と

角折れて葵の赤に驚きぬ

朝焼けに蟬を待ち詫ぶ榆大樹

蟬丸忌妻のかるたの得意札

夏の田の鉄路ゆつたり大曲

長尾 進一郎

足音に急ぎ寄り来る金魚かな

梅雨明けや今日は恋しき曇り空

遠花火夜風に乗り来低き音

蝉鳴けり地中の時の想ひ込め

ビルの街や神輿の休む木陰無く

紫陽花に眩しかりけり直射光

浜口 金魚姫

空蟬や過去を脱ぎ捨て今日を生く

悉く頷く癖や半夏生

睡蓮の葉を押し退けて亀の来る

人生を曲がる曲がらぬ濃紫陽花

落蟬や足をもだえて飛ばんとす

香水に惹かれ降り立つ旅の駅

西川 知世

梅雨雲の端の触れてゐる摩天楼

手話の子の指先夏を搔きまはす

ぬらぬらと水の流れを曲げ緋鯉

大山のあたりもつとも濃き梅雨入

百日紅に雨脚強き一日かな

葉柳のまづ昏れかかり銀座路地

次回は令和七年八月七日(木)。兼題は季語「緑  
陰(又は緑蔭)」(宮原凧さん出題)、席題は西  
川知世さん出題の「落」です。

季語を学ぶ 初学にかえつて

西川 知世

「緑蔭」は、初夏、仲夏、晩夏と夏ぢゅうに渡る  
季語。近代になって立てられた季語である。

私の持つ一番大きな歳時記は「座右版 日本大歳時記」で講談社発行のものであるが、本棚から出すのもおつくなのでいつもは常用版を使っている。夏の虫干しも兼ねて座右版を開いてみた。山本健吉の季語解説に続き【鑑賞】のところに著名な俳人の名が並ぶ。

「緑蔭に三人の老婆わらへりき 西東三鬼」を森澄雄が取り上げて鑑賞していた。独特の句の鑑賞は面白く作句のポイントが読み取れる。以下にご紹介する。【鑑賞】夏の激しい光輝の世界、その一隅の緑蔭だけが暗く、底で何か語らいながら、老婆が三人、皺涸れた声でケラケラと声を合わせて笑う光景は、何か不気味で醜怪な印象を強く与える。三人が「二人」なら忽ち明るい談笑の光景になろう。三鬼の鬼才。森澄雄（座右版 日本大歳時記より）

この句の内容は、老婆が三人笑っていたという実景だけ。作り手は言い過ぎない、説明しない。読み手は経験や体験から自由に鑑賞して良い。だからこそ句会、続く選評の時間は楽しい場となる。詠む人と読む人がそれぞれに在って自由なのが俳句・句座の醍醐味だとも言える。

緑蔭や眼鏡光りてこちを見る  
緑蔭や渚につなぐヨットあり  
緑蔭に待てば静かに歩みくる  
緑蔭のふかければ蝶ゆるやかに  
幹高く大緑蔭を支えたり

高浜虚子  
水原秋櫻子  
後藤夜半  
岸風三樓  
松本たかし

緑蔭をよるこびの影過ぎしのみ  
緑蔭にゐて靴磨あぶれたり  
尼の服黒し緑蔭を出ても尚ほ  
緑蔭を来しつめたさの耳飾り  
緑蔭にして乞はれたる煙草の火  
緑蔭の椅子の乱るるままに去る  
緑蔭を来しつめたさの耳飾り  
緑蔭に入りきれずに祝婚歌  
書類にも緑蔭の冷えありにけり  
くじらに目入れ緑蔭の飴細工

飯田龍太  
三橋鷹女  
秋元不二男  
朝倉和江  
安住 敦  
広瀬直人  
朝倉和江  
坂口匡夫  
長門幸江  
長塚佳子